

# 万葉類歌の比較——五〇一番歌と一九八八 番歌——

弓, 香織

---

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要 / 日本文学誌要

(巻 / Volume)

75

(開始ページ / Start Page)

31

(終了ページ / End Page)

39

(発行年 / Year)

2007-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00010150>

## 万葉類歌の比較——一五〇一番歌と一九八八番歌——

### はじめに

和歌には鳥が詠まれたものが多くある。万葉集もまた鳥を詠んだ歌は数多く、鳥の種類も豊富である。その中でも最も多く詠まれているのがホトトギスで、以下、雁、ウグイス、鶴と続く。歌の作者は鳥の姿に想い人を仮託したり、その声に何かしらの意味を持たせて聞き取ったりと、さまざまな詠み方をしている。万葉集の頃から、鳥は人にとって身近な親しい存在だったのだろう。また季節の花や草木などと組み合わせて詠まれることも多く、そうした組み合わせには定番といえるようなものもあり、中には似通った構成で詠まれているため類歌とされる歌もある。

類歌とは、二首以上の歌についてその構成や使用されている単語などが似通っているものを言うが、現状では共通点がどの

## 弓 香 織

程度あれば類歌と呼ぶのかといった基準が明確でなく、曖昧な点もある。しかし、類歌として扱われている歌同士に似た部分があるということは事実であり、類歌に着目してみることで、各歌を比較して問題の解消や歌の解釈を深めることにつながるのではないだろうか。

本稿では、万葉集歌の中で、それぞれホトトギスとウグイスを詠んでいる歌である一組の類歌を取り上げ、各歌を比較することで見えてくる問題について考えていきたいと思う。

### 一 問題点

対象歌とするのは類歌の關係にある一五〇一番歌と一九八八番歌で、この二首はそれぞれ鳥と花を詠み込んだ歌である。そのうち異なっているのは初句と二句で、三句以降は同じという構成になっている。

Aほととぎす 鳴く峰ねの上の 卯の花の 憂きことあれや

君が来まさぬ (巻八・一五〇一)

(霍公鳥 鳴峯乃上能 宇乃乃花之 賦事有哉 君之不来益)

Bうぐひすの 通ふ垣根の 卯の花の 憂きことあれや

君が来まさぬ (巻一〇・一九八八)

(駕之 往来垣根乃 宇能花之 賦事有哉 君之不来座)

各歌の左に括弧書きしているものは、万葉集の原文表記である。A歌は題詞に「小治田朝臣おはりだのあまひらみ広耳の歌一首」とあるが、この作者は伝未詳の人物で、他に一四七六番歌の題詞に名があり、その二首を詠んでいる男性であるということ以外は明確になっていない。B歌に題詞はないが、A・B歌は結句に「君が来まさぬ」とあるところから、両歌とも女性の立場で詠まれた歌であることは間違いない、どちらも万葉集の夏の相聞に配されている。つまりA歌は、男性である作者が、女性の立場で詠んだ恋の歌だといえる。

A歌とB歌ともに「卯の花」までの上三句が「憂きこと」を起こす序詞となっていて、そのうち三句の「卯の花」は共通であり、上二句が異なっている。この上二句のそれぞれの違いについて〈表一〉にまとめた。

〈表一〉

	A	B
主体	ほととぎす	うぐひす
動作	鳴く	通ふ
場所	峰の上	垣根

初句は主体である鳥が詠まれていて、A歌が「ほととぎす」、B歌が「うぐひす」となっている。二句目は動作と場所について、動作はA歌の「ほととぎす」が「鳴く」でB歌の「うぐひす」は「通ふ」、場所はA歌が「峰の上」、B歌が「垣根」である。

〈表二〉

	春	夏
ホトトギス	○	
ウグイス		○
卯の花		○

次に各歌の鳥と花の季節について説明したいと思う。〈表二〉は、「ホトトギス」「ウグイス」「卯の花」それぞれと季節を対応させたものである。

鳥について他の歌を見みると、ホトトギスは橘のように夏のもの、ウグイスは梅や雪などともに詠まれることが多い。またウグイスはそれ自体が春の季語としても使用されていて、それぞれ春と夏の代表的な鳥として知られている。一方、「卯の花」は初夏の頃に咲く夏の花である。

すると、夏の花である「卯の花」との組み合わせは、A歌のホトトギスは夏の鳥と夏の花という夏のもの同士で問題ないが、B歌のウグイスは春の鳥と夏の花となり、組み合わせの季節がずれてはいないだろうか。

以上を踏まえ、次の二点についての考察をしていきたい。

①「ほととぎす」「うぐひす」「卯の花」の季節と、A・B歌の作成順序。

②A・B歌の上二句の鳥の種類・動作・場所の違いと、歌の情景と口語訳。

## 二 鳥と花の組み合わせ

先に述べたように、ホトトギスは夏の鳥、ウグイスは冬から初春にかけての鳥として歌に登場する印象がある。対象歌とするA・B歌の、上二句に続く三句の「卯の花」は初夏の花である。ここで疑問となるのが、夏の花である卯の花と、春の鳥とされるウグイスがBの歌と一緒に詠まれているという点だ。類歌であるA・Bの歌において、B歌の鳥と花の季節がずれているということは、A・Bの歌のどちらが先に詠まれたのかという問題にも関わってくる。この問題について、どのような理由が考えられるだろうか。

### (一) 諸注の説

主に使用したのは、『萬葉集私注』（土屋文明・筑摩書房）、『万葉集注釈』（澤潟久孝・中央公論社）、『萬葉集全注』（阿蘇瑞枝・有斐閣）、『万葉集評釈新訂』（窪田空穂・東京堂出版）、『萬葉集釋注』（伊藤博・集英社）である。いくつかあたる結果、注釈書の解釈は、大きく分けて二つの説があった。

『萬葉集全注』など

↓「卯の花」と「憂きこと」の「ウ」に加えて、「ほととぎす」を「うぐひす」と改めることで音の合わせを強めたという意見。A歌をもとに技巧を加えてB歌が詠まれたとする。

『萬葉集釋注』など

↓B歌を踏まえて、宴席などでの座興としてA歌が詠まれたとする。

諸注釈書では、A歌をもとにB歌が詠まれていて強調のためにウグイスが用いられたという説と、B歌がもとにあつてA歌は宴席歌として詠まれたのではという説の二説をあげている。A歌を宴席の座興とする理由はおそらく、小治田朝臣広耳という男性である作者が、女性の立場で詠んだものだからだろう。ただしこの『萬葉集釋注』などの説は、そもそもこの説でのものと歌とされるB歌で何故ウグイスと卯の花が組み合わされたのかという点が明確に示されていない。他にもいくつかの理由から、本稿では、A歌からB歌が作られ音の強めのためにホトトギスをウグイスに置き換えたとする『萬葉集全注』説を支持したいと考える。以下でその理由を述べていこう。

### (二) 鳥と花の説明

まず、ホトトギスとウグイスの習性と卯の花の特徴を説明しておこうと思う。そこで、『日本国語大辞典 第二版』の内容をもとにそれぞれについてまとめ、最後に〈表三〉として一覽した。

## ・ホトトギス

↓渡りをする鳥で、日本には五月頃に渡来して八〜九月に南方へ去るため、日本では夏頃にしか姿が見られない。高原や山林に単独で住み、ウグイスの巢などに托卵するのが特徴。渡来する時期に、夜中に平野の上空を通過しながら鋭い声で鳴く習性があり、これはホトトギス固有のものである。

## ・ウグイス

↓美声でさえずる。年間を通して日本に居るが、夏は平地から高山までの各地に住み、冬に山地のものが平地に降りてくる。ウグイスは冬から初春の鳥という印象が強いが、それはこうした山地のものが平地に降りてきて、人目に付きやすい季節がその時期に当たるためと考えられる。

## ・卯の花

↓植物名は「空木（ウツギ）」。落葉性の低木で、萌芽力に優れていて刈り込みにも強い、などの点から垣根に用いやすかったのだらう。また、山中にも野生のものがよく見られる。「卯の花」とは空木の別名で、歌にはこちらの名称が主に使われている。その由来は四月の旧暦である卯月に花が咲くことからという説や、「うつぎの花」が省略されたという説、東から来た花（東は昔の方位で「卯の方」）だからとする説、白兔の毛色の連想からなど諸説ある。

〈表三〉

	時期	場所
ホトトギス	五月〜八・九月	高原・山林
ウグイス	特に冬〜春	平地〜山
卯の花	四〜六月	人家の垣根・山中

## (三) 卯の花と鳥の組み合わせ

万葉集の歌の中で卯の花が詠まれているものは二十四首あり、そのうち五首が長歌である。あわせて詠まれている鳥は、ホトトギスとウグイス以外見られず、ホトトギスが十八首、ウグイスはB歌の一首だった。ただし卯の花が詠まれている長歌五首のうち、ホトトギスとウグイスの両者とも含む歌が一首ある。

うぐひすの 卯なの中に ほととぎす ひとり生まれて 己な  
 が父に 似ては鳴かず 己が母に 似ては鳴かず 卯の花  
 の 咲きたる野辺ゆ 飛び翔り 来鳴きとよもし 橘の  
 花を居散らしひねもすに 鳴けど聞きよし 幫まはせむ 遠  
 くな行きそ 我がやどの 花橘に 住み渡れ鳥(巻九・一  
 七五五)

この長歌をみると、出だしに「うぐひすの卯の中にほととぎすひとり生まれて」とあるように、その内容は、ウグイスの巢に托卵をするホトトギスについてである。この歌のウグイスは鳥自体ではなくその巢の中の卵を示しており、主眼はあくまで

ホトトギスである。そのため、やはりウグイスと卯の花の組み合わせの歌とは言い難い。つまり、万葉集歌において、卯の花とホトトギスの組み合わせは多いが、卯の花とウグイスの組み合わせはBの歌以外に見られないのである。

また、ウグイスが詠まれている歌は全部で五十一首あるが、各歌から季節が判断出来る単語を取り出し、それによつて季節ごとに分けると、春が四十首、夏が二首、冬が五首、ウグイス以外に季節を判断出来る単語がなかったものが四首あった。このうち夏の二首は、前述の長歌である一七五五番歌とB歌の二首である。

以上のことから、万葉集の歌の中で夏のものとウグイスを組み合わせて詠んだ歌は、「卯の花」とともに詠まれたB歌以外にはないということが分かった。夏の花である卯の花と春の鳥であるウグイスをあえて組み合わせたのは、やはりA歌がもとにあり、その「ウ」の音の組み合わせをさらに活かそうとした結果だろう。その際、ウグイスは人の生活圏で生活しているという認識があつたために、詠み込む場所もウグイスに合わせて、山の「峰の上」から人家の「垣根」に変更したのではないだろうか。この点については後に三の(三)で詳しく述べる。

#### (四) 使用されている言葉

B歌に使われている言葉には、万葉集の中でこの歌にしか使われていないものがある。単語は「垣根」がB歌にのみ用いられていて、組み合わせとしては「うぐひす」と「卯の花」が万葉集に他に例を見ない。対するA歌に使われていることばと

その組み合わせを見ると、「峰の上」は万葉集にはA歌を含めて十一首あり、「ほととぎす」と「卯の花」の組み合わせは十八首ある。

また、四句目の「憂きこと」も万葉集にはA・B歌の二首しか例がない。ただし、『万葉ことは事典』（青木生子・橋本達雄監修、大和書房、二〇〇一年一〇月一〇日）によると、「憂し」ということばの使用はA・B歌を含め八首ある。八首のうち四首は仏教的厭世観を表すとされ、A・B歌と残りの二首は「思い通りにならないことを嘆く気持ちを表す。つらい、やりきれない、憎らしい意」という国語本来の「うし」の用法にあたる。ただし、卯の花と「うし」をかける例は万葉集ではA・B歌の二首のみである。

こうしてみると、A歌は使用例の多いことばや組み合わせを用いているが、B歌はことばも組み合わせも珍しいものを用いて作られていることがわかる。もしB歌をもとにA歌を詠んだとすると、珍しいことばや組み合わせで作られた歌を、あえて当時の標準的なものに換えて詠み直したということになる。それよりは、標準的な組み合わせで作られた歌を珍しい組み合わせに詠み換えたのだという方が、作られた順序として無理がないのではないだろうか。この点から考えても、A歌をもとにB歌を詠んだという流れが自然だと考えられる。

### 三 ホトトギスとウグイスのいる情景

ここでは、A歌とB歌におけるホトトギスとウグイスという

鳥の種類の違いが、歌から浮かぶ情景にどのような違いを生じさせるのかということについて述べたいと思う。

(一) 諸注による口語訳

まずA・B各歌の口語訳について、各注釈書のそれぞれものを挙げておく。注釈書は、小学館の新旧の日本古典文学全集、岩波書店の新旧の日本文学古典大系、新潮社の日本文学古典集成、以上五点である。

〈全集〉

A↓ほととぎすの鳴く峰の上の卯の花の憂いことがあつてかあ  
の人が来られないことだ。

B↓うぐいすの通う垣根の卯の花の憂いことがあつてか 君が  
見えない。

〈新全集〉

A↓ほととぎすの鳴いている尾根の卯の花の憂いことがあつて  
か あの方がいらつしやらない。

B↓うぐいすの通う垣根の卯の花の憂いことがあつてか あ  
の方がいらつしやらない。

〈大系〉

A↓(ホトトギスが鳴く峰の上の卯の花の) 厭きこと、いやな  
ことがあるからか、(ないはずだのに) どうしてあなたが  
おいでにならないのだろう。

B↓何か面白くないことがあるのかしら(そんなはずもないの  
に) あなたのおいでにならないこと。

〈新大系〉

A↓ホトトギスが鳴く山の尾根の卯の花の、心憂きことがある  
のだろうか、君がおいでにならないのは。

B↓鶯の行き通う垣根の卯の花のように、憂いことがあつてか、  
君がおいでにならない。

〈集成〉

A↓時鳥が鳴く山の頂に咲いている卯の花の名のように、私を  
憂くいとわしく思う心があるからなのかあの方はお見えに  
ならない。

B↓鶯がいつも通ってくる垣根の卯の花の名のように、うつと  
うしいことがあるとでもいうのだろうか、あの方はいつこ  
うに来て下さらない。

(二) ホトトギス

ホトトギスが詠まれているA歌の二句「鳴く峰の上の」につ  
いて考える。「峰の上」が詠まれている歌は万葉集には十一首  
あり、そのうち鳥との組み合わせ例は「ほととぎす」しかない。  
「ほととぎす」と「峰の上」の組み合わせはAの歌以外に二例  
あり、いずれもホトトギスは木の繁み辺りにいるのが興味深い。

二上の 峰の上の繁に 隠りにし そのほととぎす 待て  
ど 来鳴かず(卷一九・四二三九)  
木の暗の 繁き峰の上を ほととぎす 鳴きて越ゆなり  
今し来らしも(卷二〇・四三〇五)

他の鳥と「峰の上」の組み合わせがないことから、ホトトギスが比較的山の高い地域に生息していた、あるいは見かけられていたのだろうという印象をここから受ける。

(三) ウゲイス

一方、B歌の「通う垣根の」について、万葉集での「垣根」の使用例は他にみられなかった。そこで、「うぐひす」とともに詠まれている、場所や位置が分かることばを見てみることにする。「うぐひす」が詠まれている歌は五十一首あり、うち六首は長歌である。五十一首中、歌の中に場所・位置を示すことばが含まれるものは二十九首で、そのうち人家と関わるものはB歌を含めて十四首あった。次に挙げるのはB歌以外の人家と関係することばの例である。同一のことばを使用しているものは代表例として一首のみ挙げた。

うぐひすの 音聞くなへに 梅の花 我家の園に 咲きて  
散る 見ゆ (巻五・八四一)  
我がやどの 梅の下枝に 遊びつつ うぐひす鳴くも 散  
らまく惜しみ (巻五・八四二)  
春されば ををりにををり うぐひすの 鳴く我が山斎そ  
止まず通はせ (巻六・一〇二二) \*我が山斎Ⅱ庭  
うちなびく 春立ちぬらし 我が門の 柳の末に うぐひ  
す鳴きつ (巻一〇・一八一九)  
梅の花 咲ける岡辺に 家居れば 乏しくもあらず うぐ  
ひすの声 (巻一〇・一八二〇)

袖垂れて いざ我が園に うぐひすの 木伝ひ散らす 梅  
の花見に (巻一九・四二七七)  
うぐひすの 鳴きし垣内に にほへりし 梅この雪に う  
つろふらむか (巻一九・四二八七) \*垣内Ⅱ敷地内  
うちなびく 春とも著く うぐひすは 植木の木間を  
鳴き渡らなむ (巻二〇・四四九五)

人家に関するものが見られるところから、人の生活圏でウゲイスの姿が見られていたと考えられる。ウゲイスと人の生活圏に関して佐々木民夫は「鳴かざる春の「鶯」(『万葉集歌のことばの研究』所収、おうふう、二〇〇四年二月二〇日)で大伴家持の詠んだウゲイスの歌十二首を取り上げ、「多くが屋戸、苑といった身近な空間の中で捉えられてある。それはいわば、極めて狭く限定された自然環境で鳴く春の景物として歌われている」ものだとしている。ちなみに、ウゲイスが山や野辺といったことばと詠まれたものもあるが、数は多くない。そうしたところから、Bの歌でウゲイスの行動として(山付近から)家へ「通ふ」と詠まれたのではないだろうか。

(四) ホトトギスとウゲイスの情景

以上の事柄によって、それぞれの歌からどのような場所や情景が思い浮かぶかを考えてみよう。

A歌についてまるとめると、卯の花は山の峰にあり「野生のもの」<sup>1)</sup>、ホトトギスは渡り鳥で、山の高いところや山林など、人氣のあまりないところで鳴いている野生のものとしての印象が



強い。こうした点からAの歌からは、ホトトギスの鳴き声が聞こえる山にほど近い、あまり人氣のない土地にある家の情景が浮かんでくる。

一方B歌については、卯の花は垣根ということで「人の手が加えられている」ことは間違いないだろう。ウグイスは人家の近くで鳴く様子が詠まれるところから、Bの歌の場面は、人里の中にある、卯の花が咲くように手入れされた、ウグイスも通うような垣根のある家が情景として浮かぶのではないだろうか。

#### (五) 動作の感覚と時制

B歌においてウグイスと卯の花という季節の合わない組み合わせが詠まれているという問題について、別の視点からも言及してみよう。

〈表四〉

		感覚	動作の時制
A	「鳴く」    声・聴覚	現在	
B	「通ふ」    姿・視覚	恒常性	

〈表四〉は、A・B歌の鳥の動作から受ける感覚と、その時制を示したものである。〈表四〉に示したようにA歌とB歌における鳥の動作には、A歌の「鳴く」はホトトギスの声であり聴覚的、B歌の「通ふ」はウグイスの姿を詠んでいて視覚的、といった違いが見られる。

A歌の鳥の動作は「鳴く」で、「ホトトギスが今現在鳴いている声」が聞こえている状態を示す。これはホトトギスの鳴く時期と卯の花の咲く時期がともに夏なので、ホトトギスが鳴いている山に咲いている卯の花という状況に問題はない。一方、B歌のウグイスの動作は「通う」だが、ウグイスの通う時期と卯の花の咲く時期はそれぞれ春と夏なので季節が異なる。この問題に関する動作の時制について、以下にまとめた。

B歌でウグイスの動作として詠まれている「通う」という単語は、現在の行動だけではなく、継続して行なわれている動作を表す恒常性を持つ単語としても用いられる。例えば「私たちの通う学校は、今夏休み中だ」という文の「通う」は、「私たち」が普段行なっている習慣的行為を示しており、「夏休み中」である今、通っているわけではない。このような、習慣的な行動として使用されるのである。つまりB歌の「うぐひすの通ふ垣根」は、「ウグイスがいつも通っている垣根」という、目の前にウグイスがいない状況を表している文としても成り立つといえるのである。

以上のことから、A歌はホトトギスが「今」鳴いている山の峰の上に咲いている卯の花、B歌は、「現在の事ではないが」ウグイスがいつも通っているその垣根に（現在）咲いている卯の花を描いていると考えられる。諸注釈書の口語訳では、〈集成〉の訳文がこの点を捉えたものといえるだろう。このように「通う」が現在の行動でなくとも良いということから、ウグイスのいない状況の卯の花を詠んだとすると、B歌でウグイスと卯の花がかわせて詠まれている問題も解消でき、夏の相間に配

されていることにも矛盾がないと言える。

おわりに

以上のように、一五〇一番歌と一九八八番歌というA・B一組の類歌を比べてみることで、次の二点について言及した。

①二首のどちらが先に作られたのか

②鳥の違いによって生じる歌の情景

その結果、①A歌が先に作られた歌で、A歌をもとにしてB歌が作られた。②A歌は情景としてホトトギスの声が聞こえる山近くのあまり人気のない土地にある家、B歌は人里にある卯の花の垣根がありウグイスが姿を見せる家という情景が考えられる。という結論に至った。

(本稿は、二〇〇六年七月一五日の法政大学国文学会大会での発表に、手を加えたものです。)

(ゆみ かおり・修士課程二年)